27PE-pm067

理礼氏薬物学(第九巻)にみる薬物

○高倉　弘士[7], 澤田　采佳[4], 小松　直登[3], 西野　ゆり[5], 木村　壮太郎[2], 菰田　綾佳[2], 森田　祐基[9], 林　優樹[6], 西野　正雄[6], 宮本　如奈[1], 畠山　有理[8]([1]同志社大学(文), [2]府立藤井寺高校, [3]府立東住吉高校, [4]府立西浦高校, [5]府立長野高校, [6]府立富田林高校, [7]立命館大学大学院(社), [8]長崎大学(薬), [9]科学技術学園高校)

「はじめに」・・明治五年刊行の理礼氏薬物学は、アメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第九巻全文を解読し紹介する。

「内容」・・理礼氏薬物学は、一六巻で構成されている。漢字とカタカナ、時にカタカナを付けた英語により表記されている。巻九巻では動脈鎮効薬と神経鎮効薬を扱っている。動脈鎮効薬はアンチモニウム、吐石酒（アンチモニウム酒、アンチモニウム軟膏、アンチモニウム硬膏）、酸化アンチモニウム（アンチモニウム散）、硫化アンチモニウム（沈殿アンチモニウム、酸硫化アンチモニウム、金硫黄、複方アンチモニウム丸）、硝酸カリウム、クエン酸（クエン酸糖煉、クエン酸アンモニア）、酢酸（希酢酸、酢、蒸留酢）、酒酸。また、神経鎮効薬はジギタリス（ジギタリス浸、ジギタリスチンキ、ジギタリスアルコールエキス）、煙草（煙草浸、煙草油、煙草軟膏、煙草酒）、隻鸞菊葉根（アコニチア、隻鸞菊葉チンキ、隻鸞菊根チンキ、隻鸞菊アルコールエキス）、白黎蘆（グェトリア、グェトリア軟膏）、緑黎蘆（ 緑黎蘆チンキ、緑黎蘆流動エキス）、希青酸（苦扁桃油、苦扁桃水、ラウロセラシ水、蔵化シアニジューム、ゲルセミウム、カラバル豆）

「考察」・・神経鎮効薬では薬物として煙草が用いられている。医治性能と用法に関しては、以下の通りである。「適宜の量を使用すれば神経鎮降薬の作用をしめす。緩やかな吐薬と利尿剤を配合したように局所に使用すれば衝動薬となる。吸い込めば猛烈に咳を発し、食べれば流涎する。もし多量に用いたり、少量でもなれていない人にあっては、悪心、嘔吐、幻惑し、血行がひどく衰弱させる。」と説明されているなど今日では医薬品として使用しない例が見られる。